

「南部八戸藩志和通り」

本会の浅沼幸男氏が自費出版

南部八戸藩は、寛文4年(1664)に南部藩三代藩主南部重直が嫡子がないまま死去したため、南部藩「10万石」を二分し「盛岡藩8万石」を義弟の重信に、「八戸藩2万石」を異母弟直房にそれぞれ分割相続となり「八戸藩」が成立しました。

以来、明治維新の廃藩置県まで207年もの間、現在の紫波町の一部志和地区「志和4ヶ村(片寄村、土館村、稲藤村、上平沢村)」が八戸藩の飛び地となりました。

なぜ、八戸から200キロも離れた志和地区が飛び地になったのか、その経緯を踏まえて、志和地区の当時のありさまとか、痕跡とかを分かる範囲で調べてみました。

3年前から資料収集、現地調査を経て、概略を纏めたものです。文章もつたなく、史実と異なる解釈もあるかと思いますが、フィクションの範疇と理解して読んでいただければ幸いです。なお、内容も独断と偏見がいたるところに散見されるかと思いますが、ご容赦ください。

【「南部志和通り」ご購入ご案内の文書より】

浅沼幸男氏の著書「南部八戸藩志和通り」の表紙

(八戸南部家の家紋と八戸藩初代南部直房公の銅像)

■定価 税込2,000円 A5版 250ページ ■代金決済 本と引き換え方は現金で、郵送の場合は振込か書留で。郵送代は浅沼幸男が負担。書留は下記住所に送付。
浅沼幸男 〒028-3441 岩手県紫波郡紫波町上平沢字油田32-4 電話 090-3364-8705



《《令和4年4月～5月行事予定のお知らせ》》

4月17日 (日曜日)	令和4年度 定期総会	午後1時30分から午後2時30分 会場 赤石公民館 ホール
	第129回 月例発表会	午後2時45分から午後3時45分 会場 赤石公民館 ホール 発表者: 平井和夫 テーマ「吾妻鏡に見る北条義時」
5月18日 (水曜日)	第130回 月例発表会	午後7時から午後9時 会場 赤石公民館 講義室 発表者: 金濱興一 テーマ「志波城の外郭2」 発表者: 工藤睦夫 テーマ「赤沢七仏薬師像について」

3月16日に開催した第128回月例発表会において、二人の発表者が用いました資料からほんの一部文面等を、ところどころ抜粋して掲載しますので承願います。

宇部真澄氏の発表資料「ある南部杜氏の回想記3」から

1 酒造りに入る

その⑤ 新酒完成

搾りが始まると、蔵の前には青々とした杉玉が掲げられます。新酒ができたことを知らせるためです。蔵主も大喜びで新酒祝いをして下さい、ご馳走して下さい。

その後作業工程は同じく、五十本も仕込みが続き、中吟、大吟と後半になって仕込みも残すところあと少し、外は雪解けも始まり春の気配がします。

十一月に仕込みが始まり二月下旬まで百日余り、造り終了の日を私は千秋楽と言っていました。この日は盛大なお祭りで、蔵では料理屋さんを貸し切りを貸し切りにしてお祝いです。

税務署員、酒造組合、酒飯店、そして蔵人十一人、詰所六人、事務所五人と総勢三十人余り、初めに蔵主の社長挨拶でご苦勞様でしたと頭を下げられ胸がジーンとして目頭が潤みます。税務署長の挨拶では、何の事故もなく今日を迎えたことをお祝い申しますと言われ、酒造の技術面ばかりでなく、蔵人を統括して製造管理まで責任を持ち、おのおのがしっかりやってくれたことに有難く、何もかもほっと涙が出るほどの喜びでした。杜氏の仕事をしている人は皆そういうものでしょう。

呑むほど酔う程に、酒屋唄が出て踊りが出て…………。

その翌日に数人が帰って貰い、残った者はこれから約一か月、搾り、濾過、調合とやって四月十日前後に家へ帰ります。

金濱興一氏の発表資料「志波城の外郭1」から

□ 志波城 (パンフレットから)

約1200年前の志波城

平安時代の初めに北東北には横手盆地の弘田柵(801年頃)、北上盆地の胆沢城(802年)、志波城(803年)、徳丹城(812年頃)等が造営された。

このような大規模な城柵が連続して造られたのは、朝廷の積極的な領土拡大政策によるものである。北東北では774年から811年にかけての「三十八戦争」で、北上盆地の蝦夷は朝廷の統治下におかれることになった。その拠点として造られたのが、胆沢城や志波城である。

志波城跡の外回りの区画施設(外郭)は築地塀と大溝の二重で、それぞれ840mと930m四方の規模で軍事色の強い施設である。正門となる外郭南門は、桁行15m高さ11mの五間一戸の櫓門で、復元された古代の門としては、奈良の平城宮跡朱雀門に次ぐ大規模なものである。

